

## 八月の夢花火 色褪(あ)せず

8月は特別な感情が交錯する月です。そう、今年は終戦78年目です。

コロナ禍でなくても、以前ほどは故郷にみんながたくさん集まって、という機会も時代とともに少なくなってきたと思います。ひと昔前までは、お盆休みといえば、親戚中が集まって、一年で一番の大にぎわいのお祭り騒ぎだった、などという家庭も多かったでしょう。

私の祖父は、明治43年生まれで昭和50年に67歳で亡くなりました。祖父は、女・男・男・男・女の5人兄弟の2番目、男兄弟の総領でしたが、祖父が健在の頃は、兄弟（私にとっての大おじ・大おば）家族が、本家である私の実家に集まりみんなで墓参りを済ませたその晩は、飲み食い、花火に、ゲームに、スイカ割りにと、一年間で一番楽しいひとときでした。

そんな賑わいの中、祖父とその下の次男にあたる大祖父との晩酌の席に、私は、物心ついた頃から祖父が亡くなるまで、いつも付き合わされました。その席に二人の末弟である三男の大祖父がいたことはありません。太平洋戦争に22歳の若さで志願して出征し、中国広東省で銃殺されて帰らぬ人になったからです。

私にとって威厳と風格に満ちた、涙など無縁だと思っていたいい年した爺さん二人が、男兄弟三人で遊んだ幼い頃の思い出を肴に、「若かったのにかわいそうなことをした」と、時折目に涙しながら酒を手にしてしみじみと話をする様子は、ずしりと心に響き、決して亡くなった大祖父の死を普通のことと受け止めることはできませんでした。

夏の思い出でもう一つ忘れられないのが、近所の通称「クワガタおじさん」のことです。麦わら帽子とサンダルの似合う、お地藏様のような人でした。夏休みになると、近所の子どもたちを連れ出してはよく遊んでくれました。カブト虫やクワガタ、コーロギやセミやチョウチョウなどの昆虫採集に、フナやザリガニ釣り。ビワにイチジク、アケビ、ザクロ、蓮の実、なども一緒に採り方や食べ方を教えてくれたりもしました。

家にも遊びに来て、よく祖父と酒を飲んでいました。そのおじさんも、太平洋戦争帰りの一人で、酔いが深まると、きまって戦争の話をし始めたのです。

そして、その内容は、戦争の“現場”での“蛮行”の数々。詳しいことはここには書けないくらい醜くて残酷なことです。でもその話をするおじさんの様子は、悔恨の念というよりはむしろ兵隊としての誇らしい武勇伝に聞こえました。

我々子どもたちがみんな大好きな、ヒーロー的な存在のおじさんの、昼間のやさしい顔と、聞くもおぞましい戦争体験を平然と話す姿。このギャップをどう埋めていいものか。この2つの仮面をもつおじさんの、本当の顔は一体どっちなのだろうか。そのコントラストが、戦争の異常さ悲劇さを増幅するようで、幼心に胸が締め付けられる思いでした。

さて、例年この時期になると、様々な戦争に関するニュースや記事が、テレビや新聞や雑誌等で特集されます。新潟日報でも、ここ数年「あちこちのすずさん」という企画を通して、子どもたちが祖父母や近所のお年寄りから伝え聞いた体験談の作文やインタビュー記事を紹介しています。ぜひ、この時期に、子どもたちには、自分から戦争について積極的に知ろうとする機会をもってほしいものです。そして、保護者、特におじいちゃんおばあちゃんにも、子どもたちに戦争のことを知ってもらおう、伝えようとする機会をつくってほしいと思うのです。

78年間、我々は直接的に戦争を体験することはありませんでした。しかし、実際、その間も、そして今も戦争は世界のあちこちで起きています。「戦争は悪。戦争は不幸なこと。戦争はあってはならないこと。戦場に子どもたちを送りたくない。戦争の記憶を風化させてはならない。」そんなことは誰でもわかっていることです。

その当たり前のこと、戦争の悲劇と愚かさや平和の尊さを教えることは、保護者や地域や学校の大人の使命です。大切なことは、子どもたちに、いかに自分事として受け止めさせることができるかどうか。まさか、今起きている戦争に身を投じて体験させるわけにはいきません。有効なのは、できる限り身近な人間、生身な人間が、子どもにとってできる限り新鮮で信頼性のある情報を、真剣にそして繰り返しもたらすことができるかどうかだと思います。

全国で花火が真っ盛り。昨年から長岡花火も3年ぶりに復活しました。花火には、「慰霊・復興・平和」への思いが込められています。一度でいいからあんな見事な花火を見せてあげたかった、という人が私にはいます。あなたやあなたの身の回りにも、そう思う人がきっといるはずですよ。